

《調査報告》

相馬永胤ニューヨーク事績調査報告

大 谷 正
(文学部教授)

黒 沢 眞里子
(文学部教授)

永 江 雅 和
(経済学部教授)

「相馬永胤文書の基礎的研究－私学創設者の多面的分析のためのアプローチ－」(科学研究費助成事業・基盤研究(C)・課題番号 25370792)研究会では、専修大学創立者の1人であり、明治・大正期にかけて教育者・弁護士・銀行家として活躍した相馬永胤について、専修大学所蔵資料群の整理・調査・目録作成および明治9年から大正13年という約50年間にわたって書き綴られた日記の翻刻作業を行っている。同研究の一環として2014年8月、研究会メンバーのうち、大谷、黒沢、永江の3名はニューヨーク調査を行い、日記等に記録されている相馬の滞米事績の裏付け調査を行うことになった¹。調査期間は8月24日から28日までの5日間であった²。

1. 相馬永胤のNY時代居住地の追跡作業

この日(8月24日)は相馬永胤がコロンビア大学在学中の居住地を辿る調査を行った。相馬の滞米期間は1871(明治4)年7月28日から1879(明治12)年8月までであるが、その間コロンビア大学法律学校で学ぶためにマンハッタン島で過ごしたのは1875年8月から1877年5月までの間であったとされている³。しかし日記等の記録によれば、この間相馬は数度の引っ越しを行っており、この日の調査はその足跡を確認する作業となった。ガイドはRomi Nakayama氏、元不動産会社の在米駐在員で、米国における宅地建物取引資格を持つ、不動産に造詣の深い人物であり、我々の調査にとって大変有難いガイドであった。Nakayama氏から得られた重要な情報に、マンハッタンの建物はそのすべてがオンライン上で設立年代や所有者を確認できるようになっているというものがあった。これは主に不動産取引の便をはかるものであるそうだが、歴史研究にとっても有効なツールと成り得るものといえよう。

445 East 86th St.

1875年8月、ピークスキルからマンハッタンに移った相馬が最初に居住したのは、大学

から4.6マイル（7.4キロ）北上したイーストサイドであった。この地区は現在のアップタウン、セントラルパークの東側に位置し、少し歩けばセントラルパークやイーストリバーに出ることができる。現在は瀟洒な住宅地区だが、当時のマンハッタン島の開発が南方から進められてきたことを考えると、比較的北側にあるこの地区は、鬱蒼とした未開発地域であったのではないと思われる。またこの位置から、当時コロンビア大学法律学校建物があつた位置まではかなりの距離があるため、通学にはかなり不便であり、当時現地の地理に明るくなかつた相馬等が一時的に滞在したものと考えられる⁴。



445 East 86th St.付近。現在は閑静な住宅街。少し東に歩くとイーストリバーを散策することができる。

ジャクソン夫人宅（62 West 22nd St.）

相馬が次に移った住居は、ミッドタウン南部のチェルシー地区にあるジャクソン夫人宅であつた。相馬はここで江木高遠、朝比奈一、三浦（鳩山）和夫らと同宿する。この住所に現在ある建物は2階建ての商業建築であり、現在1FではファーストフードのSUBWAYが営業している。ガイドのNakayama氏によると、建物の補強材の構造から判断すると、築年はかなり古く、オリジナルは19世紀末の建築である可能性が高いとのことであつたが、そのまま相馬等が居住していた建物であるか否かは判断できない。



ジャクソン夫人宅付近62 West 22nd St.

クリントン街33号 (33 Clinton St.)

相馬永胤と朝比奈一は、1876年2月5日、ロウワー・イーストサイドにあるクリントン街33号の建物にある部屋へと2度目の引っ越しをしている。ジャクソン夫人宅での4人以上の同居生活が狭隘であったことと、大学からの距離が原因であっただろう。クリントン街は法律学校の建物から充分徒歩圏の位置にある。現在のこの地区は建物番号が合筆されている関係で、33号の正確な位置の特定が難しいが、周囲の建物は少なくとも20世紀初頭の風情を残している。



クリントン街33号付近。建物番号が合筆されているため、正確な位置の特定は難しい。

旧コロンビア大学法律学校の建物 (8 Great Jones St.)

現在のコロンビア大学キャンパスはマンハッタン北部アッパーウエストにあるが、それ以前、設立当初は現在のトリニティ・チャーチ付近、1857年から1897年までマンハッタンのミッドタウン、現在のロックフェラー・センター付近にコロンビア法律学校として立地していた。その後、相馬が在籍した時代にはメインキャンパスから離れたこの建物の位置に立地していた (1873-1883年)。この建物は1888年に建て替えられ、プラザホテル、ダコタハウスの設計で有名なヘンリー・ジェーンウェイ・ハーデンバーグ設計のシャーマーホーン・ビルとして現在に至っている。市の歴史的建造物に指定されている。



旧コロンビア大学法律学校建物付近。現在はマンハッタン北部にあるコロンビア大学だが、相馬の留学中にはミッドタウン南部に建物が位置していた。





- ① 445 E. 86th St.
1875-76年
- ② 62 West 22 St. 1876年
- ③ 33 Clinton Street 1876年
- ④ 30 Great Jones St.
1877-78年
- ⑤ 8 Great Jones Street
(法律学校建物)

マンハッタン島で相馬が居住した4カ所の位置
(⑤ 8 Great Jones Street は法律学校のあった場所)。

コロンビア大学
キャンパスの北上



- ① モーニングサイド・ハイツ
(1897年から現在まで)
- ② 1857年 マジソン通り49丁目
(相馬留学当時のメインキャンパス)
- ③ 相馬留学当時の法律学校住所
8 Great Jones Street
- ④ Park Place
(現在NY市庁舎のある場所)
- ⑤ 1754年トリニティー教会内

設立当初からのコロンビア大学メインキャンパスと法律学校の位置。

グレート・ジョーンズ街30号 (30 Great Jones St.)

卒業を控えた1876年10月、相馬は朝比奈とともにグレート・ジョーンズ街30号の建物へと、マンハッタン滞在中最後の引っ越しをする。この住居は当時の法律学校建物前のグレート・ジョーンズ通りを挟んで向いの左寄りにある。30号の建物があったと考えられる場所は、現在は建物を取り壊されて駐車場になっており、その面影は失われている。マンハッタンに移り、コロンビア大学で法律を学んだ相馬は学業に便利な場所を求めて、少なくとも4度の引っ越しを繰り返したものと思われる。



グレート・ジョーンズ街30号付近。相馬の居住地のなかで最後の場所であり、最も当時の大学に近い場所であるが、現在は駐車場となっている。

2. コロンビア大学訪問 (8月25日 10:30～12:00、参加者：大谷、黒沢、永江)

相馬が留学中はマンハッタン南部のダウントウンに立地していたコロンビア大学であるが、現在はセントラルパークの北西、ハーレム地区の西側にキャンパスを構えている。調査を実施した8月25日の同大は新入生入寮イベント中であった。キャンパス内のC.V.スター東アジア図書館（程健館長、野口幸生館員）に大学史資料課が所蔵する相馬関連資料のデジタルデータを寄贈した。併せて相馬の在学中の記録が図書館に残されているかどうかを照会したところ、東アジア図書館では19世紀に遡る日本人留学生の史料は所蔵していないとの回答を受けた。その後野口館員より同図書館書庫の案内を受けた。同図書館はかつてロースクール図書館であった建物を使用している（現在のロースクールは図書館とともに新校舎に移転している）。寒冷地であるため、書庫は地下室が充実しており、現在では地下スペースを上下2層区分して書庫として活用している。東アジア領域としては日・中・韓およびチベットの文献を収集しているが、近年では中国、韓国の文献増加が著しいのだという。同大教授であった日本文学研究者・ドナルド・キーン氏は退職にあたり、日本関連文献収集資金として50万\$を寄附している。日本関連についても野口館員の努力により収集が続けられているが、全ての分野は難しく、文学方面（除く漫画。キーン教授が寄附金の条件として課したリクエストであったという）に重点を置き収集を継続しているとのことであった。



コロンビア大学C.V.スター東アジア図書館。程健館長に相馬関連資料のデータを寄贈した。

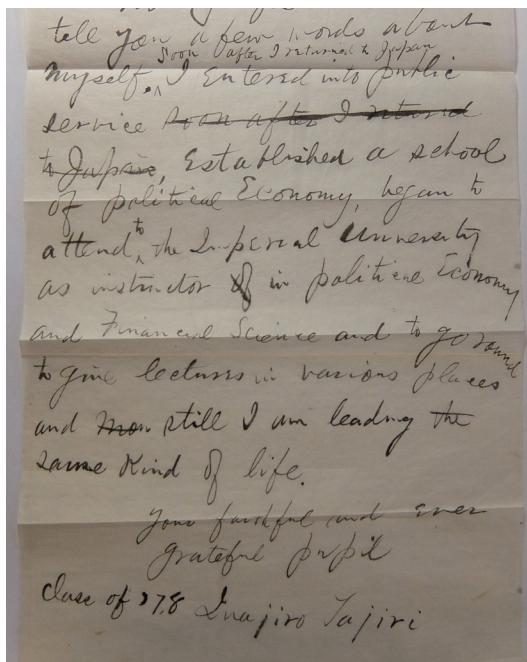
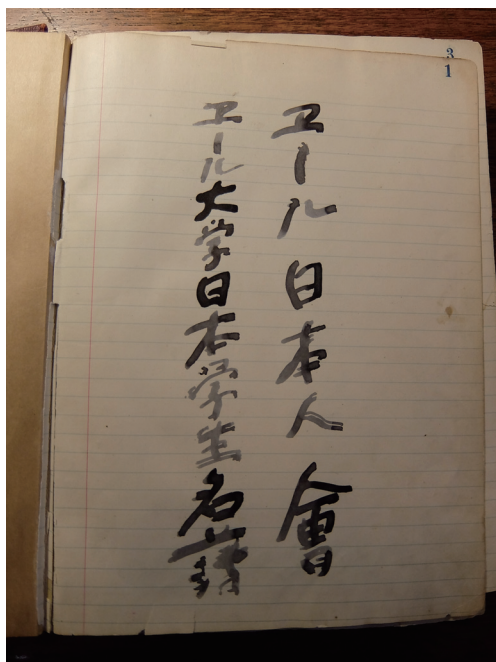
3. イェール大学訪問（8月26日 10：30～12：00、参加者：大谷、黒沢、永江）

コロンビア大学でバチュラー・オブ・ローズ（法学士）の学位を取得して卒業した相馬は、ニューヨークを離れ、1877年6月、コネチカット州ニューヘブーンにあるイェール大学の大学院へと進んだ。同大学は1701年というアメリカでも有数の歴史を持つ大学であるが、相馬が三浦、津田、目賀田らと米国で学んだ近代法律の知識を日本の青年に伝えるため、日本での学校設立の構想を抱いたのは同大学院在学中の77年夏休み合宿のことであったといい、また同大学院在学中の田尻稲次郎やラトガース大学在学中の駒井重格らとともに邦語をもって法律・経済を教育する協議を交わしたのは翌78年4月のことであったというから、同大は専修大学設立にとって重要な意思決定が行われた地であるということができる。同地で相馬は1877年6月にスミス家に寄宿、8月にはボードン・タットル家に移ったという記録があるが、今回の調査ではこれらの居住地ではなく、イェール大学マニユスクリプト・アンド・アーカイブスで所蔵されている相馬・田尻関係の史料を確認することを主目的として調査を行った。8月26日、マンハッタンからアムトラックでコネチカット州ニューヘブーン駅に到着し、その後タクシーにてイェール大学に到着した。同大では東アジア図書館員中村治子氏に面会し、案内を受けた。同大出身者で歴史学者、キュレーターとして知られる朝河貫一が使用していた研究室、グーテンベルグの聖書などの貴重書を所蔵する保存用図書館であるバイナキー図書館を見学した後、マニユスクリプト・アンド・アーカイブスにて相馬・田尻関連の史料を閲覧、撮影した。撮影した主な史料は①イェール日本人会名簿（明治期に同大に在籍した日本人留学生の名簿。相馬、田尻についても記載がある）。②同窓会誌（同大の同窓会誌は、卒業生個々の卒業後の経歴を掲載している。田尻稲次郎については記載があるが、相馬についての記載はない）。③大学史については、アジア系留学生として田尻について短い言及がある。④田尻稲次郎の直筆書簡（紹介状である）。ただし全ての史料は今関調査の際に確認済みのものであり、今回新たな関連資料を発掘することはできなかった。史料撮影後、オールドキャンパス内のストリートホール（田尻の在学時代から存在していたと伝えられる校舎）を視察。大学常設のアート

ギャラリーを見学した後、マンハッタンへと帰還した。



写真左：イエール大学キャンパス。写真右：イエール大学ストリート・ホール。同大のなかでも最も古い建物であり、相馬、田尻の在学中にも存在していた。



写真左：イエール日本人会名簿。相馬、田尻の情報も記載されている。写真右：田尻の署名のある書簡。

4. ピークスキル、ハイランドフォールズ調査（8月27日 8：30～17：00、参加者：大谷、黒沢、永江）

相馬永胤は渡米してすぐにマンハッタン島に向かったわけではなかった。1871年7月に太平洋を海路横断してサンフランシスコに上陸した相馬は、同地でカリフォルニア大学教授のカール氏宅で英語を学び、翌72年の岩倉使節団一行に加わり大陸を横断してワシントンに到着した。相馬の当初の目的はニューヨーク州にあるウェストポイント陸軍士官学校で学ぶことであったため、ウェストポイントに隣接するハイランドフォールズという街

でドナルドという人物が運営する私立学校に寄宿し、ウェストポイントの受験準備を行ったという。その後、相馬は眼病の発症と学費調達のため一時帰国したものの、74年に再渡米し、ニューヨーク州の私立学校ピークスキルハイスクールに入学し、大学進学のための勉強を重ねた。この1872年から75年までの間、相馬が過ごしたハイランドフォールズ、ピークスキルはマンハッタン島西側を流れるハドソン川を北上し、現在のベアー・マウンテン国立公園付近に位置する。ピークスキルは東岸の街であり、ハイランドフォールズはそこからベアーマウンテンブリッジでハドソン川を渡河し、さらに北上した西岸の街である。ハドソン川では1807年にロバート・フルトンによる蒸気船の運航が開始されており、またピークスキルにはハドソン川東岸沿いに鉄道も通じていたことから、マンハッタンとのアクセスは良好な場所であったといえる。

8月27日、バンをチャーターし、ウェストサイドをハドソン川沿いに北上し、ワシントンブリッジで渡河し、ニューヨーク州ピークスキルへと向かった。9号線を北上し、ピークスキルに到着。ピークスキルはストーブ（石炭）生産で栄えた町であり、ペンシルバニアから鉄や石炭が流通してくる一方、前述したマンハッタンとの良好なアクセスも発展の条件となっていたようである。街の高台にあるピークスキルハイスクールに到着した。かつてここにピークスキル・ミリタリー・アカデミーが存在し、相馬はここで1874～75年の間、学んだとされる。隣接するPeekskill City School District Administration Centerは1926年築の建物。敷地に隣接するDepew Fieldsはアカデミーに付属する運動公園であり、煉瓦造りの門柱には1852年の刻印を確認することができた。相馬も滞在中この運動公園でスポーツに取り組む学生たちの姿を眺めたことだろう。



写真左：ピークスキルハイスクール、写真右：Peekskill City School District Administration Center.

その後街の図書館であるThe Fields Libraryに移動し、参考係のRobert J. Boyle氏に、ピークスキルハイスクールおよび私学校の校長であったロバート・ドナルド氏（Robert Donald）にまつわる文献を紹介された。前述したように相馬がピークスキルに移る前、1872年にドナルドという人物の運営する私立学校に通い、寄宿した地であるからである。

Boyle氏の協力によりヴァーモント州ミドルベリー・カレッジの卒業生名簿からRobert Donaldの経歴が明らかとなった。1838年ニューヨーク州ウェスト・ゴールウェイ（West Galway, N.Y.）生まれ。1854-1855年ミドルベリー・カレッジで学んだ後、1859年ユニオン大学に進学、1862年学士取得。1864-1866年ニューヨーク州サンド・レイク・カレッジエイト・インスティテュート（Sand Lake Collegiate Institute）の副校長を務めた後、ハイランドフォールズで寄宿制男子校を数年経営。ピークスキル・ミリタリー・アカデミーでは、1873年チャールズ・J・ライト大佐とともに4代目の校長となるが、1880年にパートナーシップを解消し経営から退く。1885-1888年ミネソタ州レーンズボロにて『レーンズボロ・ジャーナル』の編集者。1888-1890年ニューヨーク州コーンウォール＝オン＝ハドソンにあるニューヨーク・ミリタリー・アカデミーの英文学教授。生涯独身とある。

また、相馬が通ったドナルド氏の私学校（Donald-Highland Institute）の宣伝を1871年出版されたニューヨーク州のガイドブックの中に見つけることができた。ドナルドの経歴から、これから向かうハイランドフォールズの私学校はサンド・レイク・カレッジエイト・インスティテュートの副校長を辞めた1866年以降に開校し、ミネソタに移住する1885年前に閉校したものと思われる。

ピークスキルの名士であり、先ほどの運動公園の名称にもなっているデフュー氏（Chauncey Mitchell Depew）は、1865年31歳の若さで駐日大使を打診された（後に辞退）経験のあった人物であったという。図書館近くにあるピークスキル・ミュージアムは19世紀のアメリカ家屋の中にかつての街の発展の足跡を展示する小型博物館であるが、調査日は閉館日であり、外観のみ眺めることとなった。

次にハドソン川を渡り、ハイランドフォールズへ移動。ハイランドフォールズには、先に述べたドナルド氏が経営した私学校（Donald-Highland Institute）が存在し、さらに北方には、相馬が入学を志望するも果たせなかったウェストポイント（陸軍士官学校）が存在した。近接するとはいえ、ピークスキルからハイランドフォールズへの移動は徒歩ではかなりの距離がある（ドナルド氏は騎馬にてこの間を通ったとの記録もあるが、距離に加えて高低差の大きな地形であり、その移動がかなりの困難を要したように思われる）。ただしハイランドフォールズからウェストポイントは徒歩圏内と言って良い。図書館で確認した当時の旅行ガイドブックによると、ドナルド氏の学校は、ウェストポイント陸軍士官学校合格を目指す人たちの、いわば予備校のような存在だったことがわかる。ハイランドフォールズ図書館にて、図書館員に照会したところによると、ドナルド氏の私立学校は現ウェストポイントミュージアムのある場所ではないか（かつて同地に古い女学校が存在した）という意見を得た⁵（前回今関氏らの調査では現小学校のある場所という説であった）。ウェストポイントミュージアム、ウェストポイント入口を見学・確認した後、マンハッタンに帰投した。



写真左：ハイランドフォールズ図書館、写真右：ウェストポイントミュージアム

5. NY公共図書館調査（8月28日 11：00～13：00、参加者：黒沢、永江）

合同調査の最終日は、大谷教授が別途調査のためワシントンD.C.に移動したため、黒沢教授の発案で、ニューヨーク公共図書館にて、1870年代の「家主」と「住居者」調査史料（City Directory）を閲覧した。この「家主」と「住居者」調査史料とは、マンハッタン内の不動産家主および間貸り人が掲載されている一覧表であり、同図書館では19世紀に遡って閲覧することができる。24日調査の相馬住居の記録の裏付けの可能性について調査を行った⁶。



ニューヨーク公共図書館

おわりに

以上、限られた日数であったが、相馬永胤、田尻稲次郎の米国留学についての足跡を辿る調査は一定の成果をあげることができた。相馬については、コロンビア大学、イェール大学においてこれ以上の史料を発掘するためには、より長期間の腰を据えた調査の必要があるだろう。また1871年、72年のサンフランシスコ滞在と岩倉施設団への同行、さらに73年のランシング農学校での足跡の追跡など、今後調査すべき論点も存在する。本調査の成果と限界を踏まえて、相馬永胤と他の専修大学創立者、および明治期の在米日本人留学

生のネットワークと学習実態についての歴史的理解が一層深まることを期待したい。

注

- 1 本報告書は原文を永江が執筆し、大谷、黒沢が加筆・修正したものである。
- 2 本調査に近い目的で専修大学では2008年に、「書籍『専修大学創立者物語（仮題）』刊行に伴う創立者留学先大学等における調査・取材」が実施されている。報告書作成者は校友・育友事務部育友課課長今関進（以下、今関報告書と呼ぶ）。本調査の準備段階、報告書の取りまとめにおいても、同報告書の記述に依るところ、重複する部分も多いことを明記する。
- 3 専修大学相馬永胤伝刊行会『相馬永胤伝』（専修大学出版会、1982年）799頁年譜より。以下相馬の足跡に関する年号については、断りのない限り、同書年譜に記載されたものを元に整理を行っている。
- 4 コロンビア大学は、1857年今の市庁舎があるところから、49丁目とマジソン通り(ロックフェラーセンターあたり)に移り、ここがその後40年間キャンパスとなった。法学部は大学キャンパスとは別の、1873-1883年までグレートジョーンズとラファイエット通りの建物であった。
- 5 今関報告書では、この学校の位置について、現小学校のある場所という推定がなされている。現時点では両説に決め手が見つからない状態である。
- 6 帰国後、黒沢教授が同資料に基づき、1875年時点にJacksonの名前で相馬らが滞在したらしい住居を検索したが、本報告書執筆時点で特定することはできなかった。